WHITEHOUSE

PRE-OPEN 03/20-27
OPEN 04/10-



表紙

WH

ABOUT

WHITEHOUSE WHITEHOUSE WHITEHOUSE

1960年、ネオダダイズム・オルガナイザーズの活動拠点として知られ、ネオ・ダダのリーダー吉村益信氏の住居であった「新宿ホワイトハウス」が、2019年からのChim↑Pomのスタジオを経て、2021年4月より、限定パスポート制の新たなアートスペースとしてオープンします。磯崎新氏の処女作であり、現在はChim↑Pomの卯城竜太の住居としても使われています。

先着で限定300部のみ発行されるパスポートの購入者は、White Houseで毎月開催される展覧会を鑑賞することができます。

イベント、飲み会、LINEのオープンチャットに参加できる他、新宿ホワイトハウスの奥に隠されていたのネオ・ダダの壁画(落書き？)や常設作品の鑑賞、会員サイトで若手批評家らによる様々な評論を読めるなど多数の限定コンテンツに1年間ご招待。

パスポートのデザインは石塚俊。開催される多くのイベントは会員制となり(一部は一般公開)、会員との濃厚な情報交換と当事者意識の共有によって、鑑賞者とWhite Houseを育むことを試みます。

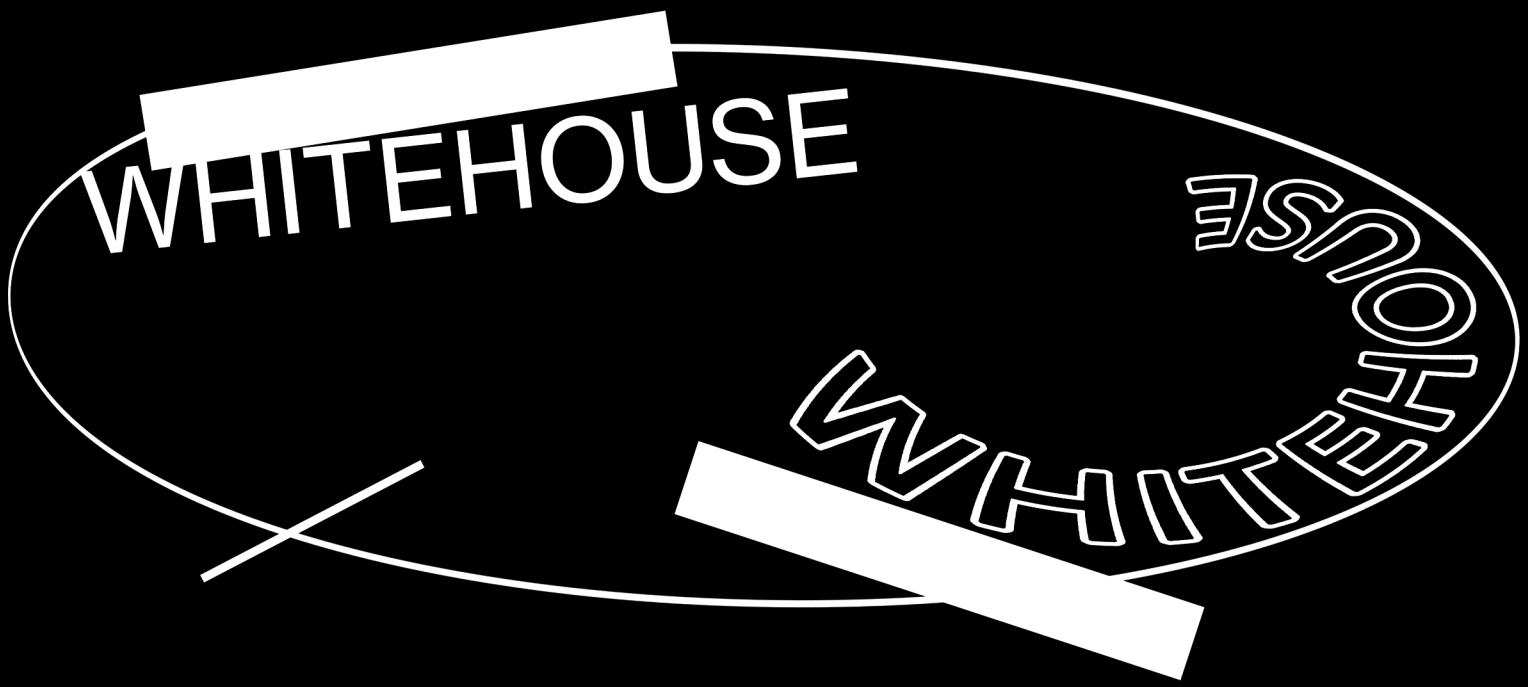
また、一般にも公開されるカフェ・バーの設計は建築家コレクティブのGROUP(井上岳、大村高広、齋藤直紀、棗田久美子、赤塚健)。新宿ホワイトハウスのオリジナルデザインと文脈をリスペクトした外構リノベーションを設計します。

映画界からは、園子温氏についての本をフランスで出版したコンスタン・ヴォアザンがイベントを企画。他にも音楽やアート、ファッション、クラフトビールなど、ライフスタイル全体からエッジな若手が集まり、総合芸術の場としてコンテンツを構成していきます。

オープンに先駆け、オンラインと現地でパスポートの申請と発行、受け取り、プレイベントなどを開催します。申請期間は、オンラインが3月19日(金)から31日(水)、現地が3月20日(土)から27日(土)まで。3月19日(金)から31日(水)には、ネオ・ダダの中核を担ったアーティストの篠原有司男氏と、当時の新宿ホワイトハウスの目撃者であったアーティストの田名網敬一氏によるトークイベントをオンライン配信。また、3月20日(土)から27日(土)までは、申請者を対象にChim↑Pomのアトリエとして新宿ホワイトハウスをスタジオビジットできるラストチャンスを設けます。

こけら落としは4月10日(土)より、uraunyの個展「uraunyy dinner」を開催いたします。皆様のパスポート申請をお待ちしております。

300部限定パスポートについて



限定パスポートは2種類をご用意。発行は先着順になります。

申請方法は、以下「申請フォーム」にアクセスしていただくオンライン申請と、
直接White Houseまでお越しいただく現地申請からお選びいただけます。

オンライン申請はPayPalでのお支払い、現地申請は現金でのお支払いが可能です。

パスポート特典
・全ての展覧会とイベントへの参加
・LINEオープンチャットへの参加
・新宿ホワイトハウスにある非公開だったネオ・ダダの壁画(落書き?)や常設作品の鑑賞
・若手批評家らによる様々な評論
・稲岡求(Chim↑Pom)作のシャワー
・特別料金でのWhite Houseへの宿泊

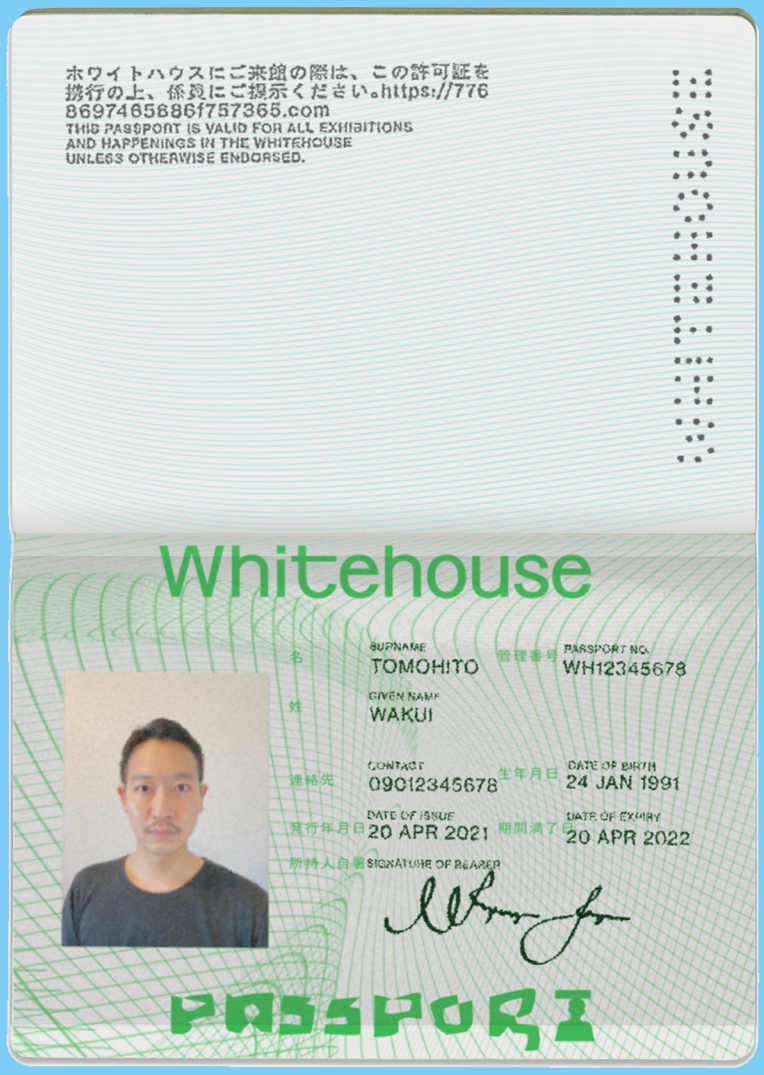
申請フォームURL
https://77686974656 86f757365.com/

オンライン申請期間:3月19日(金)~31日(日)
現地申請期間:3月20日(土)~27日(土)

弐

PASSPORT SAMPLES

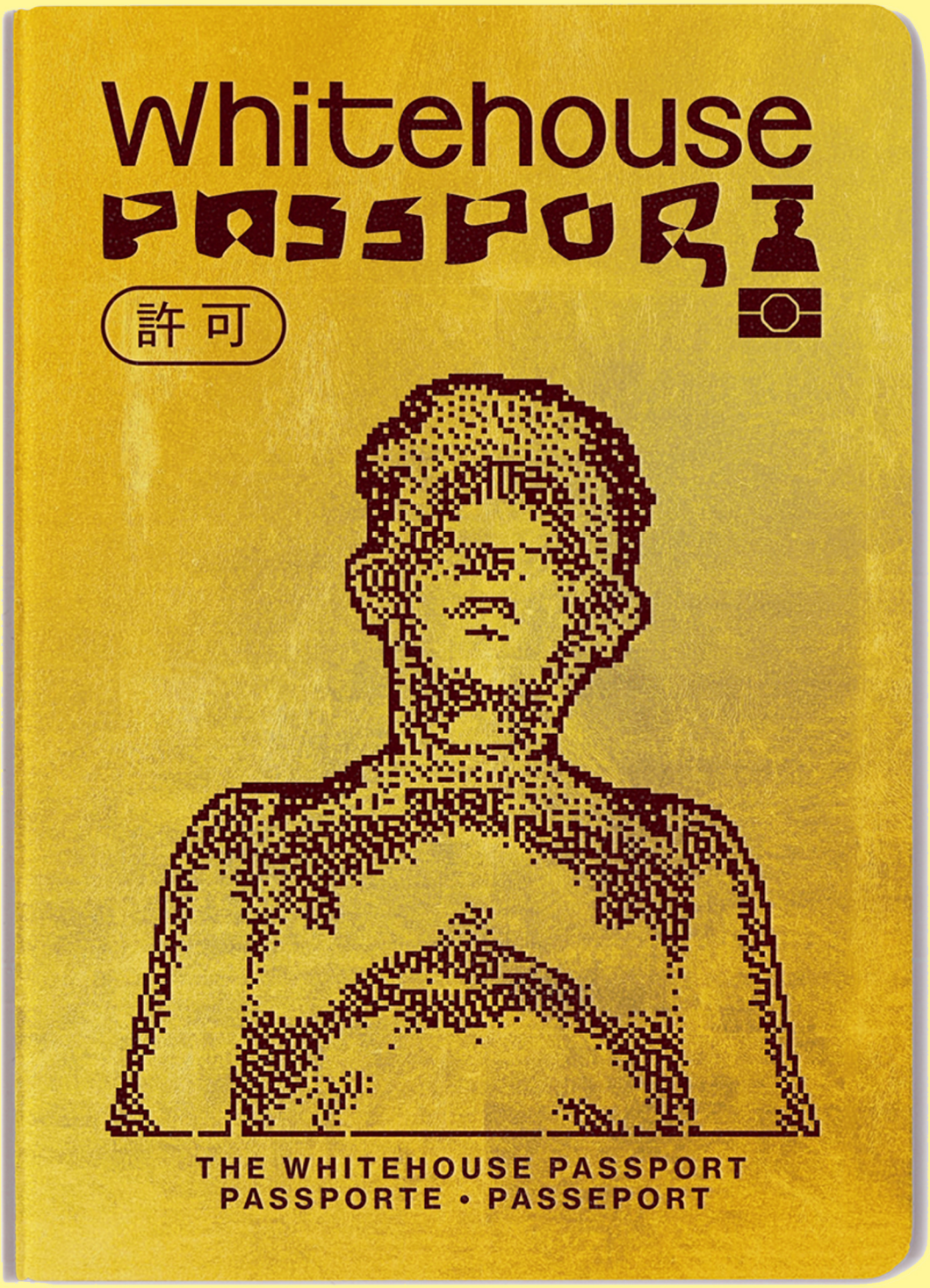




※デザインは変更する場合があります
※パスポートは１年間有効です

NORMAL 15,000JPY

WHITEHOUSE



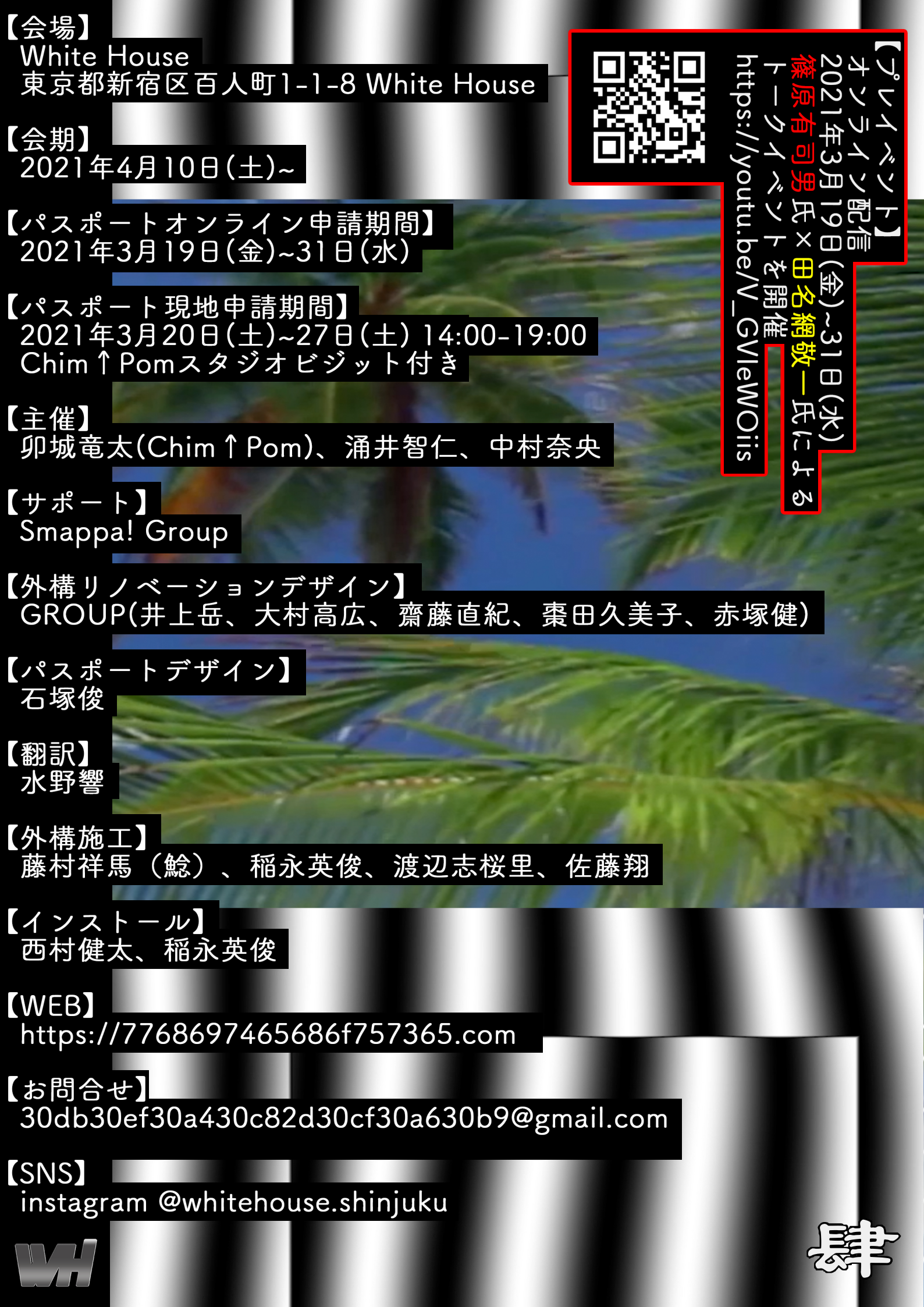
※デザインは変更する場合があります
※パスポートは１年間有効です

ADVANCED 30,000JPY

ノーマルの特典に加え、

- 展覧会ごとにアーティストor主催者によってパスポートが
  Each exhibition will be edited by
  EDITされていく
  the artist or the organizer
- サイン付き
  Autographed

+α



【会場】
White House
東京都新宿区百人町1-1-8 White House

【会期】
2021年4月10日(土)~

【パスポートオンライン申請期間】
2021年3月19日(金)~31日(水)

【パスポート現地申請期間】
2021年3月20日(土)~27日(土) 14:00-19:00
Chim↑Pomスタジオビジット付き

【主催】
卯城竜太(Chim↑Pom)、涌井智仁、中村奈央

【サポート】
Smappa! Group

【外構リノベーションデザイン】
GROUP(井上岳、大村高広、齋藤直紀、棗田久美子、赤塚健)

【パスポートデザイン】
石塚俊

【翻訳】
水野響

【外構施工】
藤村祥馬（鯰）、稲永英俊、渡辺志桜里、佐藤翔

【インストール】
西村健太、稲永英俊

【WEB】
https://776869746568 6f757365 6.com

【お問合せ】
30db30ef30a430c82d30cf30a630b9@gmail.com

【SNS】
instagram @whitehouse.shinjuku

【プレイベント】
オンライン配信
2021年3月19日(金)~31日(水)
篠原有司男氏×田名網敬一氏によるトークイベントを開催
https://youtu.be/V_GVIeWOiis

WH

肆

ART

uraun

渡辺志桜里

秋山佑太

磯崎隼士

クサムラマッドラット

オルタナティブスペースコア

ロジャー・ジャヌワタ

ナオ ナカムラ 他

WRITER

仲山ひふみ

東千茅

ジェレミー・ウールズィー

小島和日明 他

EVENT

コンスタン・ヴォアザン

浦井智仁 他

FASHION

YUKI FUJISAWA 他

MUSIC

土井木封

小松千倫 他

PERFORMANCE

三野新 他

gendainokaainosaannkaa-texisuto

現段階の参加予定アーティスト

伍



STATEMENT

ネオダダイズム・オルガナイザーズの拠点・新宿ホワイトハウスは、「前衛」の巣として熱を閉じ込めた牢であり、それを発散させた宴会場だった。

「真摯な芸術作品をふみつぶして行く二〇・六世紀の真赤にのぼせあがった地球に登場して我々が虐殺をまぬがれる唯一の手段は殺戮者にまわることだ(ネオ・ダダ第1回展マニュフェストより)」

磯崎新によって設計された、新宿ホワイトハウスの三元×三元×三元の立方体の九間は、民意を隔てたホワイトキューブとして、夜な夜な舞い上がった毒の祝祭の容れ物……サロンとなっていたようだ。そこで散った唾と、汗と、大声と、酒の匂いと、花火の閃光と、硫酸の香りと、「アクションあるのみ」と戦後をヤケクソにスパークさせた平和への挑戦……それらの痕跡は、多くのメンバーが他界した今も、錆となってキューブの内部に取り憑いている。その念にフェロモンのように誘い寄せられるのは、当時も今も、いつの時代も前衛の遺伝子である。殺戮者たらんとしたポピュリスト、ネオ・ダダの姿と新宿ホワイトハウスという実験場の、その異質性に大衆はメディアを通して何を見、恐れ、ハラハラとしたろうか。現在、至る所でその秩序は逆になり、アートは大衆に認められたコンテンツとしてパブリックを装っている。「大衆」という漠然としたモンスターを、「観客」であると勘違いしてはいけない。「前衛」が戦場で命と差し違えて最前線で闘う姿なのだとして、であればこそ大衆が安全圏にいられるのだとしたら、両者で見識と常識をすり合わせようとするいまの「アートシーン」に、前衛はない。我々は「観客」と「大衆」を切り離さなければならない。民意を隔つWhite Houseの塀の中に入るべきは、最前線のリスクで昂まる「観客」なのである。ここに既存の公共感は無い。しかし真の観客が集まる前衛の、その公共圏の概念に限りは無い。

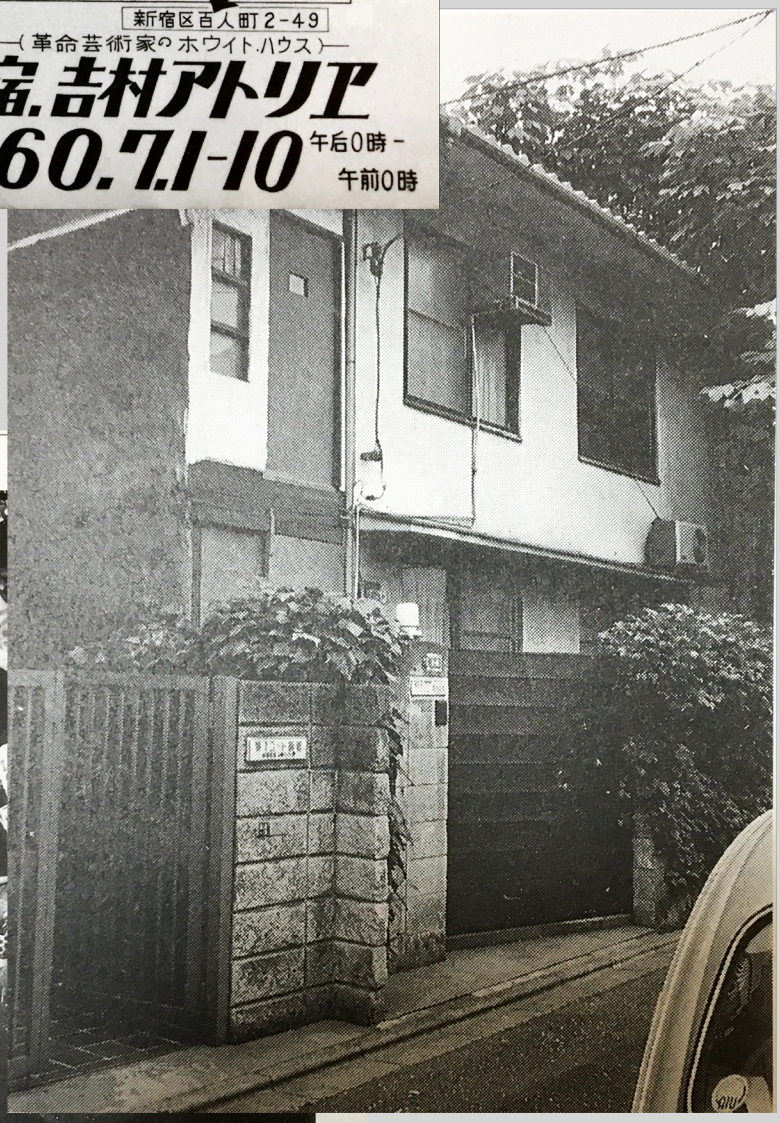
新宿ホワイトハウスから0.6世紀を経た21.2世紀、White Houseはその遺伝子を改めて募る。

卯城竜太

新宿ホワイトハウスについて（Wikipediaより引用）

新宿ホワイトハウスは、1957年（昭和32年）、磯崎新の設計で新宿区百人町に建てられた吉村益信の住居兼アトリエ。白いモルタル塗りから「ホワイトハウス」と呼ばれ、1960年（昭和35年）、ネオ・ダダの活動拠点となった。日本を代表する世界的建築家、磯崎新の処女作である。
1957年、吉村益信は親の遺産を元に新宿区百人町に土地を購入。
高校の先輩、磯崎新に住居兼アトリエの設計を依頼。磯崎の設計図に基づいて、吉村は自力で建築した。白いモルタル塗りから「ホワイトハウス」と呼ばれ、若い芸術家たちの溜り場となった。
1960年3月、赤瀬川原平、篠原有司男らとともに、ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズをホワイトハウスで結成。
同年4月、第1回ネオ・ダダイズム・オルガナイザー展（銀座画廊）
同年7月、第2回ネオ・ダダ展をホワイトハウスにて開催。ポスターには「革命芸術家のホワイトハウス」と銘打った。
同年9月、第3回ネオ・ダダ展開催（日比谷画廊）
1961年、吉村の結婚によりネオ・ダダは「蒸発」。
1962年、吉村はホワイトハウスを売却、渡米した。
その後、画家の宮田晨哉が居住。なお、現在は宮田佳が所有している。
2011年3月15日、吉村益信が死去。
2013年4月、カフェアリエがオープン（2019年3月に閉店）
2021年2月、Chim↑Pomがアトリエとして使っている。





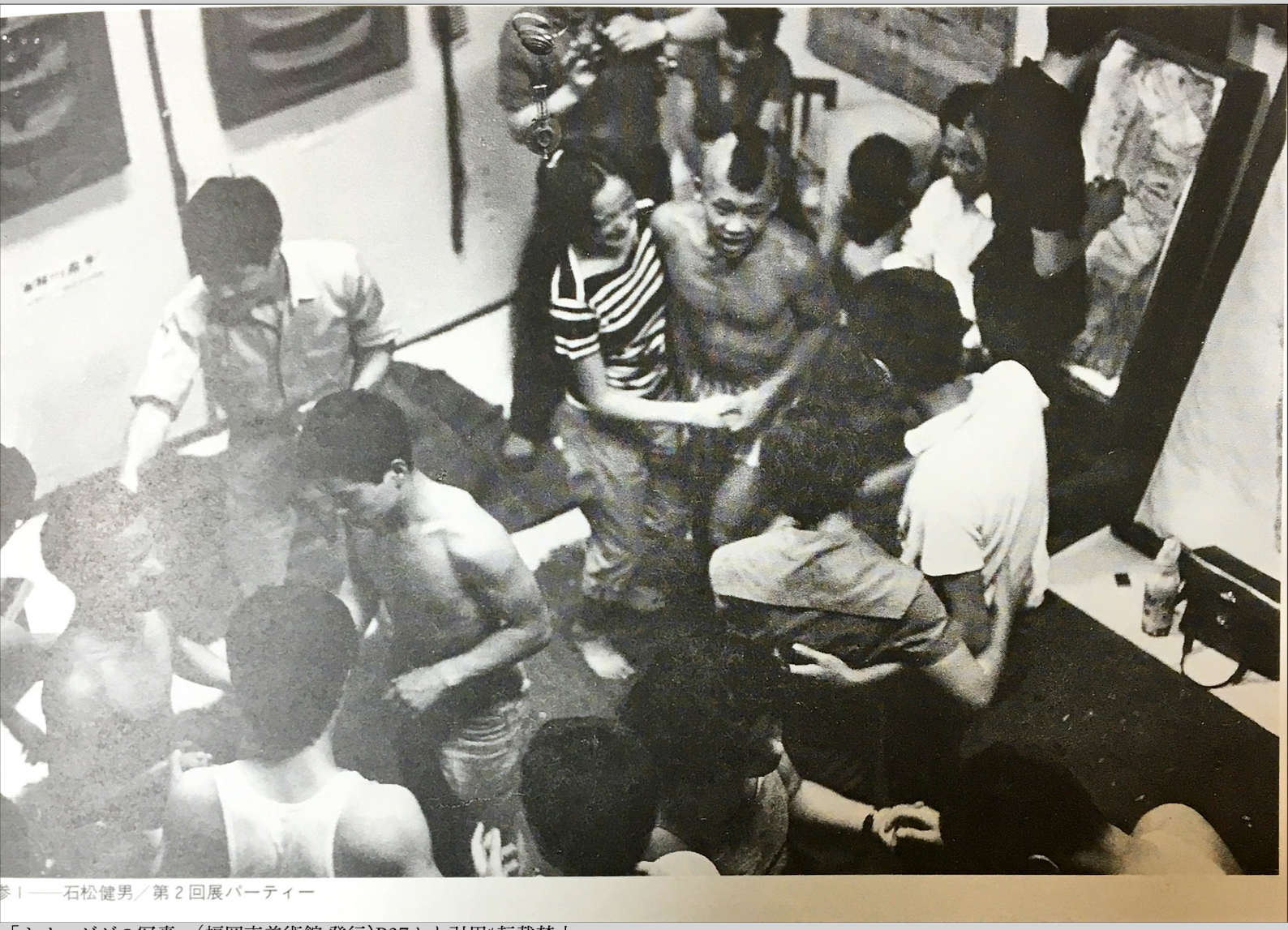


漆

「ネオ・ダダの写真」(福岡市美術館 発行)P15.16.17より引用*転載禁止

ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズについて（Wikipediaより引用）

ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズは、1960年に結成され、約半年活動した日本の前衛芸術グループ。
1960年2月に行われた第12回読売アンデパンダン展の直後、同展に「反絵画・反彫刻」（美術評論家の東野芳明が命名した）を出品していた若手アーティストたちによって結成された。メンバーは吉村益信、篠原有司男、赤瀬川原平、荒川修作、風倉匠、有吉新、石橋清治、上田純、上野紀三、豊島壮六、岸本清子。
同年4月、銀座画廊で第一回展を開催。マニフェストを引用すると、「1964年の生殖をいかに夢想しようとも一発のアトムが気軽に解決してくれるようにピカソの闘牛もすでにひき殺された野良猫の血しぶきほどに、我々の心を動かせない。真摯な芸術作品を踏みつぶしていく20.6世紀の真赤にのぼせあがった地球に登場して我々が虐殺をまぬがれる唯一の手段は殺戮者にまわることだ」。
7月、岸本清子、田中信太郎、田辺三太郎、吉野辰海を新メンバーに加えた第二回展を吉村のアトリエ（「芸術革命家のホワイトハウス」と称した）で開催した。副題は「クタバレネオ・ダダイスト。恒久平和をうちたてる。嫌悪のダンゴに蜜蜂だ。灼熱の一切が始るぞ。狂乱ドッド。功利主義に埋没したぞ。ネオ・ダダ規制法案通過。したい。したい。したい。したい。したい。したい」。
9月、抜け駆け的に村松画廊で個展を開いた荒川修作が除名された。10月、升沢金平、木下新を新メンバーに加え、三木富雄、工藤哲巳をゲストに迎えた第三回展を日比谷公園の中にあった都営の日比谷画廊で行う。作品に小便を掛けたりしたため、アンモニア臭が漂うなどの理由により、一週間の会期半ばで陳列を拒否され、画廊を閉鎖されてしまう。これがグループの最後の展覧会となった。グループの活動停止の理由は、リーダー格の吉村の結婚、および彼が所有していたホワイト・ハウスの閉鎖などによる。
伝説的なエピソードに『東京都美術館爆破計画』がある。「反芸術を徹底するために、芸術の象徴である美術館を爆破すべきである」というものだったが、「美術館の価値は絶対的なものではなく、爆破する意味はない」という意見が優勢で、実行には至らなかった。
「ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ」という呼称は正式なものではない。メンバー自身も「ネオ・ダダ・オルガナイザーズ」「ネオダダ・グループ」「グループ・ネオダダ」「ネオ・ダダ」など、さまざまな呼称を用いている。ちなみに第一回展のパンフレットに記載されたグループ名は「ネオダダイズム・オルガナイザー」であり、第二回展以降は「ネオダダ」である。
なお、このグループは形として残る作品をほとんど遺していないが、ジャクリーヌ・ポール、東松照明、石黒健治、石松健男、藤倉明治、小林正徳らがその活動を写真として記録している。



参1——石松健男／第2回展パーティー

「ネオ・ダダの写真」(福岡市美術館 発行)P37より引用*転載禁止

捌